

## 27PE-pm066

理札氏薬物学(第八卷)にみる薬物

○西野 ゆり<sup>6</sup>, 澤田 采佳<sup>4</sup>, 小松 直登<sup>3</sup>, 木村 壮太郎<sup>2</sup>, 森田 祐基<sup>5</sup>, 林 優樹<sup>7</sup>, 菰田 綾佳<sup>2</sup>, 西野 正雄<sup>7</sup>, 宮本 如奈<sup>1</sup>, 高倉 弘士<sup>8</sup>, 畠山 有理<sup>9</sup>(<sup>1</sup>同志社大学(文), <sup>2</sup>府立藤井寺高校, <sup>3</sup>府立東住吉高校, <sup>4</sup>府立西浦高校, <sup>5</sup>科学技術学園高校, <sup>6</sup>府立長野高校, <sup>7</sup>府立富田林高校, <sup>8</sup>立命館大学大学院(社), <sup>9</sup>長崎大学(薬))

「はじめに」・・・明治五年に刊行された理札氏薬物学は、アメリカの戒施理札著、備後福山の小林義直訳の一五冊一七巻の書物である。第八巻全文を解説し紹介する。

「内容」・・・理札氏薬物学は、一六巻で構成されている。漢字とカタカナ、時にカタカナを付けた英語により表記されている。第八巻では以下の内容を扱っている。迷豪薬「エーテル(硫酸エーテル、強エーテル、複方エーテル、エーテル油)、クロロホルム(クロロホルム精、クロロホルム混和剤、クロロホルム擦入油、コロロダイン、リゴリン、アミレン、アルデハイド、重コロイドメシリン、第一酸化窒素)」脊髄衝動薬「ニュクス ホミカ(ストリキニア、ブリュシア、ホミカアルコールエキス、ホミカチンキ、硫酸ストリキニーネ)、イグナチア(イグナチアアルコールエキス、トキシコデンドロン)、バッカク(バッカク流動エキス、バッカク酒)があり、バッカクの健体作用は、「男子においては別に顕著な作用はない。多量に用い或いは長期間服用するとバッカク中毒症を發す。症状は二つあり、一つは神経に関するもので疼痛、幻想を發し痙攣を引き起こす。もう一つは全身衰備症で生きる力を抑圧し、四肢冷え続いて壞疽を起こす。」と記載されている。

「考察」・・・迷豪薬とは疼痛を暖解し知覚器を作用させないものを迷豪薬というが、日常迷豪薬というのは、その蒸気を吸入し外科的手術及び手術で知覚を無くし、患者の疼痛や苦しさを知覚しないようにするものである。脊髄衝動薬とは特に脊髄及び脊髄神経に作用し、筋肉の痙攣している者にはストリキニアブリュシアを含む植物、及び子宮痙攣を促進するバッカクが紹介されている。クロロホルムなど現代使用している薬物の多くが見られる。